２０２３年9月3日　Ｎｏ.３６８３

先週の講壇から　　〝コピーじゃないの!?〟

ヘブライ人への手紙 9章23節～28節

聖句「キリストは、まことのものの写しにすぎない、人間の手で造られた聖所にではなく、天そのものに入り…」(9:24)

１．《人間の劣化》　大学時代のこと、真夜中に乗ったタクシーの運転手から「コピーやダビングと同じように、人間も世代が下るごとに質が劣化しているのでないか？」と、奇妙な議論を吹っ掛けられたことがあります。私は咄嗟に「劣化に見えて、実は、時代状況や環境に適応しているだけではないか？」と反論して、運転手を納得させて、漸くタクシーから降ろして貰ったのでした。

２．《本当の何か》　コピー機の傍らに佇むオヤジ社員を、若いOLが「忠犬コピー」と揶揄するマンガがありました。しかし、機械が信用できないから見詰めていたのかも知れません。その意味では「不忠犬」です。大切なのは機械ではなく、書類の中身です。「ヘブライ書」も、コピーと本物の違いに述べているのです。律法も神殿も礼拝も、それ自体が聖なるものではないのです。聖なる御方を証ししているだけなのです。実体ではなく「写し」「影」に過ぎないのです。私たちが毎週、礼拝に集っているのも、いつか御前に立つ時のための予行演習です。聖書も大切な何かを伝えるための本、礼拝堂も礼拝も、何かを伝えるための装置に過ぎません。私たちは「何とかして捕らえようとして努めているのです」。

３．《影を慕いて》　それどころか、私たちの人生そのものも「影」のようなもの、「写しに過ぎない」と言うのです。旧約聖書の信仰者たちを例に挙げ、彼らは「地上ではよそ者であり、仮住まいの者」で「天の故郷を熱望していた」と説くのです。「本当の故郷（私の本当の居場所）はどこにあるのか」というテーマです。この地上に、私たちの安住の地は存在しません。居心地の悪さを抱えながら生き続けなくてはなりません。信仰者の人生は、神さまの居られる場所を探し求める旅なのです。所詮「仮住まい」かも知れませんが、そんな私たちでも、互いに安らぎを与え合うことが出来るのです。天の礼拝には及びませんが、何かを映し出すことが出来るのです。未だ見ぬ何かを仰ぎ見て、表現しようではありませんか。

朝日研一朗牧師